

## 編集後記

今年も無事に4つのグループの研究成果を報告書としてまとめる運びとなった。まずは関係各位に深くお礼申し上げる。

学生諸君の実験レポートを読んでいると、仮説を支持したり棄却したりすることの難しさについて改めて考えさせられることが少なくない。理論的、抽象的な仮説に基づいて、特定の実験環境下における予測を立てる。実験の結果が予測に一致していれば仮説が支持され、予測と異なれば仮説は棄却される。そのような筋書き通りになれば理想的である。しかし、現実の世界はそれほど単純ではない。仮説から導かれる一部の予測だけが実験の結果に一致し、他の予測は一致しないことはままある。そのようなとき、仮説は部分的に支持されたと書かれたりすることがあるが、そのことは何を意味しているのか。

ある課題について反応時間と誤答率を測定したとする。反応時間については期待通りの結果が得られたのに対して、誤答率については異なる結果が得られたとする。このとき、反応時間については仮説が支持されたが、誤答率については支持されなかったと述べることにどのような意味があるのか。なぜその仮説は反応時間については妥当であり、誤答率についてはそうでないのか。また、反応時間だけから（部分的に）仮説が支持されたと主張できるのだとしたら、誤答率からは（部分的に）仮説を棄却すべきだと議論してもよいのではないか。現実的には、このような場合、誤答率はスピードと正確さのトレードオフを検討するために参照したのであり、この研究の主な従属変数は反応時間である（だから、反応時間に基づく証拠のほうが価値が高い）などと片づけたりする。だが、それは本質的な解決なのか。

あるいは、もっと込み入った場合として、仮説から導かれる予測の通りの結果が得られたにもかかわらず、仮説の正しさが疑わしいこともある。たとえば、期待通りの結果と同時に、理論的に考えて効果が現れないはずの状況でも同じパターンが見いだされるような場合である。このよう場合には、仮説に（部分的に）一致する結果が見出されたとしても仮説を（部分的にでも）支持しないほうがよい。

いずれにしても、仮説を支持すべきかどうかは、機械的に結果が予測と一致するかどうかを調べることによって判別できるものとは限らない。それを心理学における理論の未熟さと見ることもできる。しかし、そのように簡素な枠組みでものごとを捉えることはできないことを具体的に示すところこそ、実験や調査を実地で行うことの意義があるのではないだろうか。実証的研究のよさは、単に事実によって議論に決着をつけるということだけでなく、事実の厚みに触れることを通して研究者の見識を育てるという面にもあるように思う。

2019年3月9日

大正大学心理社会学部人間科学科

井関 龍太

r\_iseki@mail.tais.ac.jp